

# 国登録有形文化財 井風呂谷川砂防堰堤群

岡山の近代砂防発祥の地



## 山を治めるは国の本なり

岡山の陽明学者熊沢蕃山が遺した言葉です。蕃山が岡山藩政に関わったのは、初期の基礎固めの時期で、大洪水、凶作、飢饉が続き、その復旧・救済に奔走した年月でもありました。蕃山は洪水の原因は荒廃した山にあると考え、後年「山川は国の本である。近年、山荒れ、川浅くなったが、これは国の大荒である」と洪水の原因を河川の土砂堆積とし、「山川の政をしなければならぬ」と述べています。

蕃山の著した『集義外書』を読み、その思想を受け継いだのが、和気郡福田村（現・備前市）で名主を務めていた宇野圓三郎（えんざぶろう）です。彼は福田村で土砂流出防止の工事を行い、効果があることを実証していました。このため明治13（1880）年6月の豪雨で、高梁川流域が悲惨な状況となったのを見て、県令高崎五六に「治水建言書」を提出しました。これを機に岡山県土木掛屋となった宇野は、県営砂防工事の先頭に立ち、見延村をはじめ各地で石積堰堤、石巻谷止工、山腹工などの砂防工事を実施しました。

その後、明治26（1893）年の大洪水後「治水に関する愚見建言」を岡山県知事に提出したため、県も明治29年以降の砂防継続を決定し、県営砂防工事費の基礎を確立することになりました。

明治時代、岡山県内では各地に砂防堰堤が築造されました。高梁川に注ぐ槇谷川の支流・井風呂谷川の砂防堰堤は、宇野の指導で23基造られており、岡山県の治山治水事業の始まりの地とされています。なかでも、第三号堰堤は岡山県を代表する大規模な石造砂防堰堤です。明治33（1900）年、建設時の堰堤は高さが7.3m、幅が40mでしたが、その後44年頃と昭和初期の2度嵩上げされ、高さが11.6m、幅が72.5mになりました。1段目と2段目は空積み、3段目は練り積みで、形は現在の砂防ダムに似ています。

その後、井風呂谷川には植林が進められた結果、土砂の崩れは止まり、川の氾濫もなくなり、田畑には豊かな作物が実るようになりました。蕃山の言葉が200年を経て実を結んだ国の形です。



井風呂谷川砂防三号堰堤  
曲線平面で築かれた緩勾配法面部分に空積及び練積堰堤が嵩上げされ、総高約12m、堤長70m超。

- ※1 石を積み上げる際、隣り合う石の隙間に砂利を詰めて積み上げる工法
- ※2 石を積み上げる際、隣り合う石と石の間にコンクリートを詰めて積む工法

## 位置図



遊びながら学習できる井風呂谷川砂防公園



総社の有志が建てた「砂防工碑」

（砂防工碑 原文を要約抜粋）  
岡山県属 多田省一述作  
そもそも五穀の命脈は水にある。治水がされてなければ五穀は稔らない。ましてや、度々水害を蒙るといふことについてはいふまでもない。よつて、村々相譲りここに石碑を建ててこれを将来に告げ、併せて県下に施行の者に告げる。  
明治二十二年七月上旬



「砂防発祥の地」記念碑